

B—82 近世以降における農民服飾の研究

(第6報)

—地誌・文献にみられる労働着 (1)—

和洋女大家政 鷹司 綸子

1. 近世封建社会の中でその経済源である農耕に従事している人達にとって終日を仕事ですごすため、その仕事着は衣生活のほとんど全部ともいえるウェイトを持つ。それは働きやすく丈夫で風土に適していることが要求された。しかも出費をおさえる種々の法令で規制され自給自足を旨とした独自の文化を生み出したのである。わが国人口の8割を占めるこの服飾構成に対する考察はわが国文化の大きな一端を明らかにすることになる。

2. 県市町村史・地誌・紀行誌を主とした。

3. 労働着はそれがあまりに身近であっただけに生活合理化から手軽に入手できる新しい繊維や既製服とかわり急激に姿を消そうとしていることにそれが使えるだけ補綴更生したものだけに遺品を求めることはむずかしい。およそ服飾の研究は物を主体としてその時代相を把握併行して観察研究しなければならない。その場合、記録史学や聞とり民俗学とは異なった分野を展開しつつ零細な文献を探求しなければならないし、言葉のみを比較検討することは物と名称が往々にしてあわないことも多い。しかし、大衆民服飾は封建社会も明治御一新後もそれほど第2次世界大戦後すなわち現代のような変わり方はまずないと仮定すれば遺物のない現在では文献を中心に研究を行なう以外方法がないのではあるまいか、こと